

⑦病気や怪我

病気や怪我についてであるが、「とくにかわりはなかった」が 94 名 (46.1%) と半数近くだった。病気や怪我がある場合は「外科的な病気や怪我をした」が 45 名 (22.1%), 「身体的な活動が変化した」が 35 名 (17.2%) となっていた(複数回答)。

身体的な活動が変化したと回答した 35 名について変化の状況をみると、「低下」が 32 名 (91.4%), 「増加」が 2 名 (5.7%), 「無回答」が 1 名 (2.9%) であった。

栄養摂取に問題が生じたと回答した 15 名について変化の状況をみると、「嚥下障害」は「あり」が 7 名 (46.7%), 「なし」が 7 名 (46.7%), 「無回答」が 1 名 (6.7%) であった。「摂食障害」については「あり」が 8 名 (53.3%), 「なし」が 4 名 (26.7%), 「無回答」が 3 名 (20.0%) であった。

なお、男女による違いはほとんどなかった。

表 81 病気や怪我と性別

	男性	女性		合計			
		度数	列の N %	度数	列の N %		
内科的な 病気に なった	なし	90	84.9%	81	82.7%	171	83.8%
	あり	8	7.5%	9	9.2%	17	8.3%
	無回答	8	7.5%	8	8.2%	16	7.8%
	合計	106	100.0%	98	100.0%	204	100.0%
外科的な 病気や怪 我をした	なし	77	72.6%	66	67.3%	143	70.1%
	あり	21	19.8%	24	24.5%	45	22.1%
	無回答	8	7.5%	8	8.2%	16	7.8%
	合計	106	100.0%	98	100.0%	204	100.0%
身体の活 動が変化 した	なし	76	71.7%	77	78.6%	153	75.0%
	あり	22	20.8%	13	13.3%	35	17.2%
	無回答	8	7.5%	8	8.2%	16	7.8%
	合計	106	100.0%	98	100.0%	204	100.0%
栄養に摂 取に問題 が生じた	なし	91	85.8%	82	83.7%	173	84.8%
	あり	7	6.6%	8	8.2%	15	7.4%
	無回答	8	7.5%	8	8.2%	16	7.8%
	合計	106	100.0%	98	100.0%	204	100.0%
その他	なし	93	87.7%	87	88.8%	180	88.2%
	あり	5	4.7%	3	3.1%	8	3.9%
	無回答	8	7.5%	8	8.2%	16	7.8%
	合計	106	100.0%	98	100.0%	204	100.0%
とくにか わりはな かった	なし	49	46.2%	45	45.9%	94	46.1%
	あり	49	46.2%	45	45.9%	94	46.1%
	無回答	8	7.5%	8	8.2%	16	7.8%
	合計	106	100.0%	98	100.0%	204	100.0%
わからな い	なし	92	86.8%	88	89.8%	180	88.2%
	あり	6	5.7%	2	2.0%	8	3.9%
	無回答	8	7.5%	8	8.2%	16	7.8%
	合計	106	100.0%	98	100.0%	204	100.0%

病気や怪我と年齢をみると、年齢による違いはあまりなかった。

表 82 病気や怪我と年齢

	前期高齢者 (74歳未満)	後期高齢者 (75~84歳)		超高齢者 (85歳以上)		合計			
		度数	行の N %	度数	行の N %	度数	行の N %	度数	
内科的な 病気に なった	なし	40	23.4%	86	50.3%	45	26.3%	171	100.0%
	あり	6	35.3%	9	52.9%	2	11.8%	17	100.0%
	無回答	1	6.3%	14	87.5%	1	6.3%	16	100.0%
	合計	47	23.0%	109	53.4%	48	23.5%	204	100.0%
外科的な 病気や怪 我をした	なし	39	27.3%	71	49.7%	33	23.1%	143	100.0%
	あり	7	15.6%	24	53.3%	14	31.1%	45	100.0%
	無回答	1	6.3%	14	87.5%	1	6.3%	16	100.0%
	合計	47	23.0%	109	53.4%	48	23.5%	204	100.0%
身体の活 動が変化 した	なし	35	22.9%	78	51.0%	40	26.1%	153	100.0%
	あり	11	31.4%	17	48.6%	7	20.0%	35	100.0%
	無回答	1	6.3%	14	87.5%	1	6.3%	16	100.0%
	合計	47	23.0%	109	53.4%	48	23.5%	204	100.0%
栄養に摂 取に問題 が生じた	なし	43	24.9%	88	50.9%	42	24.3%	173	100.0%
	あり	3	20.0%	7	46.7%	5	33.3%	15	100.0%
	無回答	1	6.3%	14	87.5%	1	6.3%	16	100.0%
	合計	47	23.0%	109	53.4%	48	23.5%	204	100.0%
その他	なし	45	25.0%	90	50.0%	45	25.0%	180	100.0%
	あり	1	12.5%	5	62.5%	2	25.0%	8	100.0%
	無回答	1	6.3%	14	87.5%	1	6.3%	16	100.0%
	合計	47	23.0%	109	53.4%	48	23.5%	204	100.0%
とくにか わりはな かった	なし	24	25.5%	47	50.0%	23	24.5%	94	100.0%
	あり	22	23.4%	48	51.1%	24	25.5%	94	100.0%
	無回答	1	6.3%	14	87.5%	1	6.3%	16	100.0%
	合計	47	23.0%	109	53.4%	48	23.5%	204	100.0%
わからな い	なし	43	23.9%	92	51.1%	45	25.0%	180	100.0%
	あり	3	37.5%	3	37.5%	2	25.0%	8	100.0%
	無回答	1	6.3%	14	87.5%	1	6.3%	16	100.0%
	合計	47	23.0%	109	53.4%	48	23.5%	204	100.0%

⑧行方不明対策

行方不明を防止するための対策を講じていたかをみると、「様子をいつも注意してみるようにしていた」が 126 名 (61.8%) と約 6 割で最も多かった（複数回答）。以下、「戸締りを厳密に行っていた」が 64 名 (31.4%)、 「近隣の人に異常を発見したら知らせてもらうように依頼した」が 56 名 (27.5%) などとなっていた。しかし、「とくになし」も 46 名 (22.5%) あり、2 割以上は何の対策もしていなかった。

なお、男女別にみると「戸締りを厳密に行っていた」のは、高齢者が女性の場合の方が多くなっていた。

表 83 行方不明対策と性別

	男性		女性		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
戸締りを厳密に 行っていた	なし	81 76.4%	57 58.2%	138 67.6%		
	あり	23 21.7%	41 41.8%	64 31.4%		
	無回答	2 1.9%	0 0.0%	2 1.0%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		
様子をいつも注 意してみるよう にしていた	なし	41 38.7%	35 35.7%	76 37.3%		
	あり	63 59.4%	63 64.3%	126 61.8%		
	無回答	2 1.9%	0 0.0%	2 1.0%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		
センサーを設置 した	なし	99 93.4%	93 94.9%	192 94.1%		
	あり	5 4.7%	5 5.1%	10 4.9%		
	無回答	2 1.9%	0 0.0%	2 1.0%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		
近隣の人に異常 を発見したら知 らせてもらうよ うに依頼した	なし	73 68.9%	73 74.5%	146 71.6%		
	あり	31 29.2%	25 25.5%	56 27.5%		
	無回答	2 1.9%	0 0.0%	2 1.0%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		
G P S など位置 情報検出器を使 用していた	なし	86 81.1%	88 89.8%	174 85.3%		
	あり	18 17.0%	10 10.2%	28 13.7%		
	無回答	2 1.9%	0 0.0%	2 1.0%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		
S O S ネットな ど、自治体の取 り組みに登録し た	なし	92 86.8%	90 91.8%	182 89.2%		
	あり	12 11.3%	8 8.2%	20 9.8%		
	無回答	2 1.9%	0 0.0%	2 1.0%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		
その他	なし	99 93.4%	93 94.9%	192 94.1%		
	あり	5 4.7%	5 5.1%	10 4.9%		
	無回答	2 1.9%	0 0.0%	2 1.0%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		
とくになし	なし	79 74.5%	77 78.6%	156 76.5%		
	あり	25 23.6%	21 21.4%	46 22.5%		
	無回答	2 1.9%	0 0.0%	2 1.0%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		
わからない	なし	101 95.3%	97 99.0%	198 97.1%		
	あり	3 2.8%	1 1.0%	4 2.0%		
	無回答	2 1.9%	0 0.0%	2 1.0%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		

行方不明対策を年齢別にみると、年齢による違いはあまりなかった。

表 84 行方不明対策と年齢

	前期高齢者 (74歳未満)	後期高齢者 (75~84歳)		超高齢者 (85歳以上)		合計
		度数	列の N %	度数	列の N %	
戸締りを厳密に 行っていた	なし	30 63.8%	74 67.9%	34 70.8%	138 67.6%	
	あり	17 36.2%	33 30.3%	14 29.2%	64 31.4%	
	無回答	0 0.0%	2 1.8%	0 0.0%	2 1.0%	
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%	
様子をいつも注 意してみるよう にしていた	なし	18 38.3%	37 33.9%	21 43.8%	76 37.3%	
	あり	29 61.7%	70 64.2%	27 56.3%	126 61.8%	
	無回答	0 0.0%	2 1.8%	0 0.0%	2 1.0%	
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%	
センサーを設置 した	なし	45 95.7%	101 92.7%	46 95.8%	192 94.1%	
	あり	2 4.3%	6 5.5%	2 4.2%	10 4.9%	
	無回答	0 0.0%	2 1.8%	0 0.0%	2 1.0%	
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%	
近隣の人に異常 を発見したら知 らせてもらうよ うに依頼した	なし	35 74.5%	81 74.3%	30 62.5%	146 71.6%	
	あり	12 25.5%	26 23.9%	18 37.5%	56 27.5%	
	無回答	0 0.0%	2 1.8%	0 0.0%	2 1.0%	
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%	
G P S など位 置情報検出器を使 用していた	なし	41 87.2%	90 82.6%	43 89.6%	174 85.3%	
	あり	6 12.8%	17 15.6%	5 10.4%	28 13.7%	
	無回答	0 0.0%	2 1.8%	0 0.0%	2 1.0%	
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%	
S O S ネットな ど、自治体の取 り組みに登録し た	なし	46 97.9%	95 87.2%	41 85.4%	182 89.2%	
	あり	1 2.1%	12 11.0%	7 14.6%	20 9.8%	
	無回答	0 0.0%	2 1.8%	0 0.0%	2 1.0%	
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%	
その他	なし	46 97.9%	100 91.7%	46 95.8%	192 94.1%	
	あり	1 2.1%	7 6.4%	2 4.2%	10 4.9%	
	無回答	0 0.0%	2 1.8%	0 0.0%	2 1.0%	
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%	
とくになし	なし	36 76.6%	85 78.0%	35 72.0%	156 76.5%	
	あり	11 23.4%	22 20.2%	13 27.1%	46 22.5%	
	無回答	0 0.0%	2 1.8%	0 0.0%	2 1.0%	
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%	
わからない	なし	46 97.9%	104 95.4%	48 100.0%	198 97.1%	
	あり	1 2.1%	3 2.8%	0 0.0%	4 2.0%	
	無回答	0 0.0%	2 1.8%	0 0.0%	2 1.0%	
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%	

8. 行方不明後の対応

今回の調査対象は全員が警察に行方不明者届が出された者である。以下に、当該高齢者が行方不明になった後の対応や高齢者の状況について述べる。

①警察への行方不明者届の提出

行方不明者届が警察へ提出されたのは、「当日」が174名(85.3%)と8割以上を占めていた。「翌日」の23名(11.3%)と合わせると、ほとんどのケースが翌日までに行方不明者届が提出されていた。

なお、男女による差はほとんどなかった。

表 85 警察への行方不明者届提出と性別

	男性		女性		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
当日	89	84.0%	85	86.7%	174	85.3%
翌日	14	13.2%	9	9.2%	23	11.3%
3~4日目	0	0.0%	1	1.0%	1	.5%
1週間以内	1	.9%	0	0.0%	1	.5%
1ヶ月以内	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
それ以上	1	.9%	0	0.0%	1	.5%
わからない	0	0.0%	2	2.0%	2	1.0%
無回答	1	.9%	1	1.0%	2	1.0%
合計	106	100.0%	98	100.0%	204	100.0%

警察への行方不明者届の提出と年齢をみると、年齢による違いはほとんどなかった。

表 86 警察への行方不明者届提出と年齢

	前期高齢者 (74歳未満)		後期高齢者 (75~84歳)		超高齢者 (85 歳以上)		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
当日	41	87.2%	92	84.4%	41	85.4%	174	85.3%
翌日	6	12.8%	12	11.0%	5	10.4%	23	11.3%
3~4日目	0	0.0%	1	.9%	0	0.0%	1	.5%
1週間以内	0	0.0%	1	.9%	0	0.0%	1	.5%
1ヶ月以内	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
それ以上	0	0.0%	1	.9%	0	0.0%	1	.5%
わからない	0	0.0%	0	0.0%	2	4.2%	2	1.0%
無回答	0	0.0%	2	1.8%	0	0.0%	2	1.0%
合計	47	100.0%	109	100.0%	48	100.0%	204	100.0%

②警察以外の捜索活動の開始

警察以外で捜索活動が開始されたのは、「当日開始された」が150名(73.5%)と7割以上であった。

「翌日開始された」の25名(12.3%)を合わせると8割以上が翌日までに捜索を開始していた。しかし、19名(9.3%)は「行われなかつた」と回答した。

なお、男女による違いはほとんどなかった。

表 87 警察以外の捜索活動開始と性別

	男性		女性		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
当日開始された	74	69.8%	76	77.6%	150	73.5%
翌日開始された	14	13.2%	11	11.2%	25	12.3%
3~4日目に開始された	1	.9%	0	0.0%	1	.5%
1週間以内に開始された	1	.9%	0	0.0%	1	.5%
1ヶ月以内に開始された	1	.9%	0	0.0%	1	.5%
それ以上の期間内で開始された	1	.9%	0	0.0%	1	.5%
わからない	0	0.0%	1	1.0%	1	.5%
行われなかつた	11	10.4%	8	8.2%	19	9.3%
無回答	3	2.8%	2	2.0%	5	2.5%
合計	106	100.0%	98	100.0%	204	100.0%

警察以外の捜索活動開始と年齢をみると、年齢が高くなるほど、「当日開始された」が多くなっていた。

表 88 警察以外の捜索活動開始と年齢

	前期高齢者 (74歳未満)		後期高齢者 (75~84歳)		超高齢者 (85 歳以上)		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
当日開始された	31	66.0%	78	71.6%	41	85.4%	150	73.5%
翌日開始された	7	14.9%	14	12.8%	4	8.3%	25	12.3%
3~4日目に開始された	0	0.0%	1	.9%	0	0.0%	1	.5%
1週間以内に開始された	0	0.0%	1	.9%	0	0.0%	1	.5%
1ヶ月以内に開始された	0	0.0%	1	.9%	0	0.0%	1	.5%
それ以上の期間内で開始された	1	2.1%	0	0.0%	0	0.0%	1	.5%
わからない	1	2.1%	0	0.0%	0	0.0%	1	.5%
行われなかつた	5	10.6%	11	10.1%	3	6.3%	19	9.3%
無回答	2	4.3%	3	2.8%	0	0.0%	5	2.5%
合計	47	100.0%	109	100.0%	48	100.0%	204	100.0%

警察以外の捜索活動参加者は、「家族」が 149 名 (73.0%) で最も多かった(複数回答)。次は「近隣住民」の 63 名 (30.9%), 「地域の消防団」の 48 名 (23.5%) となっていた。なお、「地域の S O S ネットワークなどの組織」は 15 名 (7.4%) に過ぎなかった。

なお、男女による違いはあまりなかった。

表 89 警察以外の捜索活動参加者と性別

	男性		女性		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
地方自治体職員	なし	98 92.5%	83 84.7%	181 88.7%		
	あり	6 5.7%	11 11.2%	17 8.3%		
	無回答	2 1.9%	4 4.1%	6 2.9%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		
地域の消防団	なし	77 72.6%	73 74.5%	150 73.5%		
	あり	27 25.5%	21 21.4%	48 23.5%		
	無回答	2 1.9%	4 4.1%	6 2.9%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		
ケアサービス従事者	なし	84 79.2%	76 77.6%	160 78.4%		
	あり	20 18.9%	18 18.4%	38 18.6%		
	無回答	2 1.9%	4 4.1%	6 2.9%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		
地域の S O S ネットワークなどの組織	なし	96 90.6%	87 88.8%	183 89.7%		
	あり	8 7.5%	7 7.1%	15 7.4%		
	無回答	2 1.9%	4 4.1%	6 2.9%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		
近隣住民	なし	72 67.9%	63 64.3%	135 66.2%		
	あり	32 30.2%	31 31.6%	63 30.9%		
	無回答	2 1.9%	4 4.1%	6 2.9%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		
家族	なし	28 26.4%	21 21.4%	49 24.0%		
	あり	76 71.7%	73 74.5%	149 73.0%		
	無回答	2 1.9%	4 4.1%	6 2.9%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		
その他	なし	89 84.0%	80 81.6%	169 82.8%		
	あり	15 14.2%	14 14.3%	29 14.2%		
	無回答	2 1.9%	4 4.1%	6 2.9%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		
いなかつた	なし	96 90.6%	87 88.8%	183 89.7%		
	あり	8 7.5%	7 7.1%	15 7.4%		
	無回答	2 1.9%	4 4.1%	6 2.9%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		
わからない	なし	103 97.2%	91 92.9%	194 95.1%		
	あり	1 .9%	3 3.1%	4 2.0%		
	無回答	2 1.9%	4 4.1%	6 2.9%		
	合計	106 100.0%	98 100.0%	204 100.0%		

警察以外の捜索活動参加者と年齢をみると、年齢による違いはあまりなかった。

表 90 警察以外の捜索活動参加者と年齢

	前期高齢者 (74歳未満)		後期高齢者 (75~84歳)		超高齢者 (85歳以上)		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
地方自治体職員	なし	40 85.1%	96 88.1%	45 93.8%	181 88.7%			
	あり	4 8.5%	11 10.1%	2 4.2%	17 8.3%			
	無回答	3 6.4%	2 1.8%	1 2.1%	6 2.9%			
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%			
地域の消防団	なし	33 70.2%	80 73.4%	37 77.1%	150 73.5%			
	あり	11 23.4%	27 24.8%	10 20.8%	48 23.5%			
	無回答	3 6.4%	2 1.8%	1 2.1%	6 2.9%			
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%			
ケアサービス従事者	なし	36 76.6%	86 78.9%	38 79.2%	160 78.4%			
	あり	8 17.0%	21 19.3%	9 18.8%	38 18.6%			
	無回答	3 6.4%	2 1.8%	1 2.1%	6 2.9%			
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%			
地域の S O S ネットワークなどの組織	なし	42 89.4%	97 89.0%	44 91.7%	183 89.7%			
	あり	2 4.3%	10 9.2%	3 6.3%	15 7.4%			
	無回答	3 6.4%	2 1.8%	1 2.1%	6 2.9%			
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%			
近隣住民	なし	31 66.0%	71 65.1%	33 68.8%	135 66.2%			
	あり	13 27.7%	36 33.0%	14 29.2%	63 30.9%			
	無回答	3 6.4%	2 1.8%	1 2.1%	6 2.9%			
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%			
家族	なし	11 23.4%	26 23.9%	12 25.0%	49 24.0%			
	あり	33 70.2%	81 74.3%	35 72.9%	149 73.0%			
	無回答	3 6.4%	2 1.8%	1 2.1%	6 2.9%			
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%			
その他	なし	36 76.6%	90 82.6%	43 89.6%	169 82.8%			
	あり	8 17.0%	17 15.6%	4 8.3%	29 14.2%			
	無回答	3 6.4%	2 1.8%	1 2.1%	6 2.9%			
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%			
いなかつた	なし	42 89.4%	99 90.8%	42 87.5%	183 89.7%			
	あり	2 4.3%	8 7.3%	5 10.4%	15 7.4%			
	無回答	3 6.4%	2 1.8%	1 2.1%	6 2.9%			
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%			
わからない	なし	42 89.4%	105 96.3%	47 97.9%	194 95.1%			
	あり	2 4.3%	2 1.8%	0 0.0%	4 2.0%			
	無回答	3 6.4%	2 1.8%	1 2.1%	6 2.9%			
	合計	47 100.0%	109 100.0%	48 100.0%	204 100.0%			

③発見までの期間

当該高齢者が行方不明になってから発見されるまでの期間であるが、「当日」が 80 名 (39.2%) と最も多く、「翌日」の 69 名 (33.8%) を合わせると、7割以上が翌日までに発見されていた。

男女による違いをみると、「3~4日目」に発見されているのは女性より男性が多かったが、その他にはあまり違いはみられなかった。

表 91 発見までの期間と性別

	男性		女性		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
当日	40	37.7%	40	40.8%	80	39.2%
翌日	35	33.0%	34	34.7%	69	33.8%
3~4日目	11	10.4%	3	3.1%	14	6.9%
1週間以内	3	2.8%	6	6.1%	9	4.4%
1ヶ月以内	7	6.6%	8	8.2%	15	7.4%
半年以内	5	4.7%	4	4.1%	9	4.4%
1年以内	1	.9%	2	2.0%	3	1.5%
1年以上	1	.9%	0	0.0%	1	.5%
わからない	0	0.0%	1	1.0%	1	.5%
無回答	3	2.8%	0	0.0%	3	1.5%
合計	106	100.0%	98	100.0%	204	100.0%

発見までの期間と年齢をみると、超高齢者は当日の内に半数が発見されていた。その他にあまり違いはみられなかった。

問 92 発見までの期間と年齢

	前期高齢者 (74歳未満)		後期高齢者 (75~84歳)		超高齢者 (85 歳以上)		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
当日	17	36.2%	39	35.8%	24	50.0%	80	39.2%
翌日	15	31.9%	36	33.0%	18	37.5%	69	33.8%
3~4日目	5	10.6%	8	7.3%	1	2.1%	14	6.9%
1週間以内	2	4.3%	7	6.4%	0	0.0%	9	4.4%
1ヶ月以内	5	10.6%	8	7.3%	2	4.2%	15	7.4%
半年以内	3	6.4%	5	4.6%	1	2.1%	9	4.4%
1年以内	0	0.0%	3	2.8%	0	0.0%	3	1.5%
1年以上	0	0.0%	1	.9%	0	0.0%	1	.5%
わからない	0	0.0%	0	0.0%	1	2.1%	1	.5%
無回答	0	0.0%	2	1.8%	1	2.1%	3	1.5%
合計	47	100.0%	109	100.0%	48	100.0%	204	100.0%

9. 発見時の状態とその後の経過

今回の調査対象には、生存した発見されたものだけでなく、死亡して発見された者も含まれている。以下に、発見時の状態とその後の経過について述べる。

①発見時の状態

発見時の状態であるが、「普段と変わりはなかった」が74名(36.3%)、「衰弱していたが歩行は可能だった」が34名(16.7%)、「衰弱し歩行不可能だった」が9名(4.4%)であり、計117名(57.4%)が生存して発見された。それに対して87名(42.6%)は死亡した状態で発見された。

男女による違いであるが、女性の場合、49名(50.0%)と半数が死亡した状態で発見されているのに対して、男性の場合は死亡していたのは38名(35.8%)であった。

表93 発見時の状態と性別

	男性		女性		合計	
	度数	列のN%	度数	列のN%	度数	列のN%
普段と変わりはなかった	43	40.6%	31	31.6%	74	36.3%
衰弱していたが歩行は可能だった	19	17.9%	15	15.3%	34	16.7%
衰弱し歩行不可能だった	6	5.7%	3	3.1%	9	4.4%
亡くなっていた	38	35.8%	49	50.0%	87	42.6%
合計	106	100.0%	98	100.0%	204	100.0%

発見時の状態と年齢をみると、後期高齢者では死亡して発見された者が54名(49.5%)とほぼ半数に達していた。それに対して超高齢者では死亡して発見されたのは13名(27.1%)と3割を切っていた。

表94 発見時の状態と年齢

	前期高齢者 (74歳未満)		後期高齢者 (75~84歳)		超高齢者 (85歳以上)		合計	
	度数	列のN%	度数	列のN%	度数	列のN%	度数	列のN%
普段と変わりはなかった	21	44.7%	31	28.4%	22	45.8%	74	36.3%
衰弱していたが歩行は可能だった	2	4.3%	20	18.3%	12	25.0%	34	16.7%
衰弱し歩行不可能だった	4	8.5%	4	3.7%	1	2.1%	9	4.4%
亡くなっていた	20	42.6%	54	49.5%	13	27.1%	87	42.6%
合計	47	100.0%	109	100.0%	48	100.0%	204	100.0%

②発見された場所

行方不明者が発見された場所(生死を問わず)は、「3より遠いが町村内」が55名(27.0%)であり、僅差で「4より遠いが、県内」の49名(24.0%)であり、両者で過半数を占めていた。つまり、半数以

上が普段移動する範囲より遠くで発見されていた。

男女による違いをみると、男性では「4より遠いが、県内」が多く、女性では「3より遠いが町村内」が多かった。

表95 発見された場所と性別

	男性		女性		合計	
	度数	列のN%	度数	列のN%	度数	列のN%
自宅内	0	0.0%	1	1.0%	1	.5%
自宅の付近	14	13.2%	13	13.3%	27	13.2%
(2)自宅の付近よりは遠いが近所	16	15.1%	17	17.3%	33	16.2%
(3)2より遠いが、およそ普段移動する範囲	12	11.3%	12	12.2%	24	11.8%
(4)3より遠いが町村内	22	20.8%	33	33.7%	55	27.0%
4より遠いが、県内	31	29.2%	18	18.4%	49	24.0%
県外	7	6.6%	4	4.1%	11	5.4%
わからない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
無回答	4	3.8%	0	0.0%	4	2.0%
合計	106	100.0%	98	100.0%	204	100.0%

発見された場所と年齢をみると、前期高齢者と後期高齢者は「3より遠いが町村内」が最も多く、超高齢者では「3より遠いが町村内」と「4より遠いが、県内」が同数で最も多かった。

表96 発見された場所と年齢

	前期高齢者 (74歳未満)		後期高齢者 (75~84歳)		超高齢者 (85歳以上)		合計	
	度数	列のN%	度数	列のN%	度数	列のN%	度数	列のN%
自宅内	0	0.0%	1	.9%	0	0.0%	1	.5%
自宅の付近	5	10.6%	13	11.9%	9	18.8%	27	13.2%
(2)自宅の付近よりは遠いが近所	9	19.1%	17	15.6%	7	14.6%	33	16.2%
(3)2より遠いが、およそ普段移動する範囲	2	4.3%	15	13.8%	7	14.6%	24	11.8%
(4)3より遠いが町村内	16	34.0%	28	25.7%	11	22.9%	55	27.0%
4より遠いが、県内	13	27.7%	25	22.9%	11	22.9%	49	24.0%
県外	2	4.3%	7	6.4%	2	4.2%	11	5.4%
わからない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
無回答	0	0.0%	3	2.8%	1	2.1%	4	2.0%
合計	47	100.0%	109	100.0%	48	100.0%	204	100.0%

発見された場所と発見までの期間であるが、行方不明の「当日」に発見されていても、およそ普段移動する範囲より遠くで発見される例が6割近くに達していた。行方不明者は自ら自動車を運転したり、公共の交通機関を利用したりして行方不明になることもあります。当日の内に遠方に行ってしまうこともある。

表97 発見までの期間と発見された場所

	自宅内	自宅の付近	(2) 自宅の付近よりは遠いが、およそ普段移動する近所		(3) 2より遠いが、およそ普段移動する範囲		(4) 3より遠いが町村内		4より遠いが、県内		県外		合計			
			度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %		
当日	0	0.0%	11	40.7%	16	48.5%	6	27.3%	25	45.5%	18	37.5%	3	27.3%	79	40.1%
翌日	1	100.0%	12	44.4%	11	33.3%	5	22.7%	18	32.7%	18	37.5%	3	27.3%	68	34.5%
3~4日目	0	0.0%	0	0.0%	3	9.1%	3	13.6%	2	3.6%	6	12.5%	0	0.0%	14	7.1%
1週間以内	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	3	13.6%	5	9.1%	0	0.0%	0	0.0%	9	4.6%
1ヶ月以内	0	0.0%	2	7.4%	1	3.0%	3	13.6%	4	7.3%	4	8.3%	1	9.1%	15	7.6%
半年以内	0	0.0%	1	3.7%	2	6.1%	1	4.5%	1	1.8%	2	4.2%	2	18.2%	9	4.6%
1年以内	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	4.5%	0	0.0%	0	0.0%	2	18.2%	3	1.5%
合計	1	100.0%	27	100.0%	33	100.0%	22	100.0%	55	100.0%	48	100.0%	11	100.0%	197	100.0%

③発見した人

行方不明者を発見した人であるが、最も多かったのは「上記以外」の 99 名 (48.5%), つまり、当該行方不明者の捜索に参加していなかった者が半数近くを占めていた。次に多かったのは「実際に捜索に参加した者」の 81 名 (39.7%) であった。

男女による違いはあまりなかった。

表 98 発見した人と性別

	男性		女性		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
実際に捜索に参加した者	39	36.8%	42	42.9%	81	39.7%
ご本人が自力で帰宅した	6	5.7%	2	2.0%	8	3.9%
届出した家族	3	2.8%	4	4.1%	7	3.4%
上記以外	54	50.9%	45	45.9%	99	48.5%
わからない	1	.9%	2	2.0%	3	1.5%
複数回答	2	1.9%	2	2.0%	4	2.0%
無回答	1	.9%	1	1.0%	2	1.0%
合計	106	100.0%	98	100.0%	204	100.0%

発見した人と年齢をみると、後期高齢者では「上記以外」が 59 名 (54.1%) と過半数を占めていた。逆に前期高齢者では「実際に捜索に参加した者」が 23 名 (48.9%) と半数近くを占めていた。

表 99 発見した人と年齢

	前期高齢者 (74歳未満)		後期高齢者 (75~84歳)		超高齢者 (85歳以上)		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
実際に捜索に参加した者	23	48.9%	40	36.7%	18	37.5%	81	39.7%
ご本人が自力で帰宅した	1	2.1%	3	2.8%	4	8.3%	8	3.9%
届出した家族	0	0.0%	2	1.8%	5	10.4%	7	3.4%
上記以外	21	44.7%	59	54.1%	19	39.6%	99	48.5%
わからない	2	4.3%	1	.9%	0	0.0%	3	1.5%
複数回答	0	0.0%	3	2.8%	1	2.1%	4	2.0%
無回答	0	0.0%	1	.9%	1	2.1%	2	1.0%
合計	47	100.0%	109	100.0%	48	100.0%	204	100.0%

捜索に参加した SOS ネットワークなどの有効性であるが、「わからない」が 63 名 (30.9%), 「SOS ネット等は利用しなかった」が 61 名 (29.9%), 「SOS ネット等はなかった」が 22 名 (10.8%) であり、約 7 割は SOS ネットワークなどの有効性の評価をしていなかった。有効性を評価しても、「有効であった」が 22 名 (10.8%), 「有効でなかつた」が 20 名 (9.8%) と評価が割れていた。

なお、男女による違いはほとんどなかった。

表 100 SOS ネット等の有効性と性別

	男性		女性		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
有効であった	13	12.3%	9	9.2%	22	10.8%
有効でなかつた	10	9.4%	10	10.2%	20	9.8%
SOS ネット等はなかつた	9	8.5%	13	13.3%	22	10.8%
SOS ネット等は利用しなかつた	33	31.1%	28	28.6%	61	29.9%
わからない	34	32.1%	29	29.6%	63	30.9%
無回答	7	6.6%	9	9.2%	16	7.8%
合計	106	100.0%	98	100.0%	204	100.0%

SOSネット等の有効性と年齢をみると、年齢による違いはあまりなかった。

表 101 SOSネット等の有効性と年齢

	前期高齢者 (74歳未満)		後期高齢者 (75~84歳)		超高齢者 (85 歳以上)		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
有効であった	4	8.5%	10	9.2%	8	16.7%	22	10.8%
有効でなかった	5	10.6%	12	11.0%	3	6.3%	20	9.8%
SOSネット等は なかった	6	12.8%	10	9.2%	6	12.5%	22	10.8%
SOSネット等は 利用しなかった	12	25.5%	34	31.2%	15	31.3%	61	29.9%
わからない	17	36.2%	31	28.4%	15	31.3%	63	30.9%
無回答	3	6.4%	12	11.0%	1	2.1%	16	7.8%
合計	47	100.0%	109	100.0%	48	100.0%	204	100.0%

④死亡事例の死亡推定時期と死因

死亡推定時期は、行方不明になった「当日」が34名(39.1%)と最も多かった。「翌日」になると15名(17.2%)となり、日数が経過するにしたがって減少していった。

なお、男女による違いであるが、男女ともに「当日」が一番多いが、男性では「3~4日目」の10名(26.3%)、女性では「翌日」の12名(24.5%)が2番目に多かった。

表 102 死亡推定時期と性別

	男性		女性		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
当日	14	36.8%	20	40.8%	34	39.1%
翌日	3	7.9%	12	24.5%	15	17.2%
3~4日目	10	26.3%	2	4.1%	12	13.8%
1週間以内	5	13.2%	6	12.2%	11	12.6%
それ以上	5	13.2%	4	8.2%	9	10.3%
わからない	0	0.0%	5	10.2%	5	5.7%
無回答	1	2.6%	0	0.0%	1	1.1%
合計	38	100.0%	49	100.0%	87	100.0%

死亡推定時期と年齢をみると、翌日までの死亡者は、前期高齢者は4割であるが、後期高齢者では6割、超高齢者では7割となっていた。

表 103 死亡推定時期と年齢

	前期高齢者 (74歳未満)		後期高齢者 (75~84歳)		超高齢者 (85 歳以上)		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
当日	7	35.0%	21	38.9%	6	46.2%	34	39.1%
翌日	1	5.0%	11	20.4%	3	23.1%	15	17.2%
3~4日目	3	15.0%	9	16.7%	0	0.0%	12	13.8%
1週間以内	3	15.0%	6	11.1%	2	15.4%	11	12.6%
それ以上	3	15.0%	4	7.4%	2	15.4%	9	10.3%
わからない	3	15.0%	2	3.7%	0	0.0%	5	5.7%
無回答	0	0.0%	1	1.9%	0	0.0%	1	1.1%
合計	20	100.0%	54	100.0%	13	100.0%	87	100.0%

死亡事例について死因の記載があった61名について下記に示す。最も多かったのは「溺死」で17名(27.9%)であったが、「水死」の7名(11.5%)を合わせると24名(40%)となった。また「凍死」は13名(21.3%)で、「低体温症」の8名(13.1%)を合わせると21名(35.0%)となった。この2つで全体の7割を占めた。

なお、死因が明記されていなかったが海や川で発見されたものは「水死」とした。また、心筋梗塞や熱中症などは「病気」とした。複数の原因が記載されたり、分類が困難だったりしたものは「その他」とした。詳細は「表 128・129 死亡事例の要約」を参照して頂きたい。

表 104 死因

(人数/%)		
溺死	17	27.9
水死	7	11.5
低体温症	8	13.1
凍死	13	21.3
事故	9	14.8
病気	5	8.2
その他	2	3.3
合計	61	100.0

死因と性別をみると、男性では「凍死」が7名(31.8%)と最も多く、僅差で「溺死」の6名(27.3%)が続いた。女性では「溺死」が11名(28.2%)と最も多かったが、他の死因については同じくらいの割合であった。

表 105 死因と性別

	男性		女性		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
溺死	6	27.3%	11	28.2%	17	27.9%
水死	2	9.1%	5	12.8%	7	11.5%
低体温症	2	9.1%	6	15.4%	8	13.1%
凍死	7	31.8%	6	15.4%	13	21.3%
事故	3	13.6%	6	15.4%	9	14.8%
病気	2	9.1%	3	7.7%	5	8.2%
その他	0	0.0%	2	5.1%	2	3.3%
合計	22	100.0%	39	100.0%	61	100.0%

死因と年齢をみると、前期高齢者では「事故」が4名(28.6%)と多くなっているが、「溺死」、「水死」、「低体温症」、「凍死」も2名(14.3%)と様々であった。後期高齢者では「溺死」が14名(35.9%)と他の死因よりも多くなっていた。超高齢者では「凍死」が5名(62.5%)と6割以上を占めていた。

表 106 死因と年齢

	前期高齢者 (74歳未満)		後期高齢者 (75~84歳)		超高齢者 (85歳以上)		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
溺死	2	14.3%	14	35.9%	1	12.5%	17	27.9%
水死	2	14.3%	4	10.3%	1	12.5%	7	11.5%
低体温症	2	14.3%	5	12.8%	1	12.5%	8	13.1%
凍死	2	14.3%	6	15.4%	5	62.5%	13	21.3%
事故	4	28.6%	5	12.8%	0	0.0%	9	14.8%
病気	1	7.1%	4	10.3%	0	0.0%	5	8.2%
その他	1	7.1%	1	2.6%	0	0.0%	2	3.3%
合計	14	100.0%	39	100.0%	8	100.0%	61	100.0%

死因と季節であるが、春は「溺死」と「凍死」が4名(25.0%)ずつで、他の死因も2~3名ずつあった。夏は「溺死」が5名(62.5%)で6割を占めていた。秋は「溺死」が4名(36.4%)と最も多いため、「凍死」も3名(27.3%)いた。そして冬は「凍死」が6名(27.3%)と最も多いため、「水死」、「低体温症」、「事故」も4名(18.2%)ずつおり、死因は様々であった。

表107 死因と季節

	春			夏			秋			冬			複数回答			わからぬ			合計		
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %											
溺死	4	25.0%	5	62.5%	4	36.4%	3	13.6%	0	0.0%	1	33.3%	17	27.9%							
水死	3	18.8%	0	0.0%	0	0.0%	4	18.2%	0	0.0%	0	0.0%	7	11.5%							
低体温症	2	12.5%	0	0.0%	0	0.0%	4	18.2%	1	100.0%	1	33.3%	8	13.1%							
凍死	4	25.0%	0	0.0%	3	27.3%	6	27.3%	0	0.0%	0	0.0%	13	21.3%							
事故	3	18.8%	0	0.0%	2	18.2%	4	18.2%	0	0.0%	0	0.0%	9	14.8%							
病気	0	0.0%	2	25.0%	2	18.2%	0	0.0%	0	0.0%	1	33.3%	5	8.2%							
その他	0	0.0%	1	12.5%	0	0.0%	1	4.5%	0	0.0%	0	0.0%	2	3.3%							
合計	16	100.0%	8	100.0%	11	100.0%	22	100.0%	1	100.0%	3	100.0%	61	100.0%							

表108 死因と行方不明になつた時間帯

	0~4時			4~8時			8~12時			12~16時			16~20時			20~24時			わからぬ			複数回答			合計		
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	
溺死	4	57.1%	2	28.6%	1	25.0%	5	29.4%	3	18.8%	0	0.0%	2	40.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	17	27.9%			
水死	0	0.0%	2	28.6%	0	0.0%	2	11.8%	2	12.5%	1	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	7	11.5%			
低体温症	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	11.8%	3	18.8%	0	0.0%	1	20.0%	1	100.0%	1	100.0%	8	13.1%							
凍死	2	28.6%	2	28.6%	2	50.0%	3	17.6%	3	18.8%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	13	21.3%			
事故	1	14.3%	1	14.3%	0	0.0%	2	11.8%	3	18.8%	2	66.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	9	14.8%			
病気	0	0.0%	0	0.0%	1	25.0%	1	5.9%	2	12.5%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	5	8.2%					
その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	11.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	3.3%					
合計	7	100.0%	7	100.0%	4	100.0%	17	100.0%	16	100.0%	3	100.0%	5	100.0%	1	100.0%	1	100.0%	61	100.0%							

死因と行方不明になつた時間帯であるが、「0~4時」は「溺死」が4名(57.1%)、「凍死」が2名(28.6%)となっていた。「4~8時」は「溺死」、「水死」、「凍死」が2名(28.6%)ずつであった。「8~12時」は「凍死」が2名(50.0%)で半数であった。

「12~16時」は、「溺死」が5名(29.4%)と多くなっているが、他の死因も2~3名ずついる。「16~20時」はどの死因も2~3名ずつで、特に多い死因はなかった。「20~24時」は「事故」が2名(66.7%)、「水死」が1名(33.3%)であった。

死因と行方不明後の死亡推定時期であるが、「当日」の場合は「事故」の8名(30.8%),「溺死」の6名(23.1%)が多かったが、「水死」と「凍死」も4名(15.4%)ずつおり、死因は様々であった。

「翌日」になると「溺死」が5名(35.7%)と最も多く、「低体温症」と「凍死」が3名(21.4%)ずつであった。「3~4日目」になると「低体温症」と「凍死」が2名(40.0%)ずつなどとなっていた。

「1週間以内」では「溺死」が3名(37.5%),「水死」と「低体温症」が2名(25.0%)ずつであった。

「それ以上」になると「凍死」が4名(80.0%)と多かった。

	度数	列のN%	合計											
													度数	列のN%
溺死	6	22.2%	5	35.7%	1	20.0%	3	37.5%	1	20.0%	1	50.0%	17	27.9%
水死	4	14.8%	1	7.1%	0	0.0%	2	25.0%	0	0.0%	0	0.0%	7	11.5%
低体温症	1	3.7%	3	21.4%	2	40.0%	2	25.0%	0	0.0%	0	0.0%	8	13.1%
凍死	4	14.8%	3	21.4%	2	40.0%	0	0.0%	4	80.0%	0	0.0%	13	21.3%
事故	9	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	9	14.8%
病気	3	11.1%	1	7.1%	0	0.0%	1	12.5%	0	0.0%	0	0.0%	5	8.2%
その他	0	0.0%	1	7.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	50.0%	2	3.3%
合計	27	100.0%	14	100.0%	5	100.0%	8	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	61	100.0%

⑤生存事例の発見後の経過と現在

生存して発見された事例について、発見後の経過をみると「もともとの居住地へ帰った」が80名(68.4%)と約7割を占めた。「治療が必要で入院した」は12名(10.3%),「もともとの居住地では受入が困難なため施設に入所した」が10名(8.5%)で、それぞれ約1割であった。

表110 発見後の経過と性別

	男性		女性		合計	
	度数	列のN%	度数	列のN%	度数	列のN%
治療が必要で入院した	10	14.7%	2	4.1%	12	10.3%
治療は必要なかったが入院した	2	2.9%	0	0.0%	2	1.7%
もともとの居住地へ帰った	45	66.2%	35	71.4%	80	68.4%
もともとの居住地では受入が困難なため施設に入所した	3	4.4%	7	14.3%	10	8.5%
その他	3	4.4%	3	6.1%	6	5.1%
わからない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
無回答	5	7.4%	2	4.1%	7	6.0%
合計	68	100.0%	49	100.0%	117	100.0%

発見後の経過と年齢をみると、年齢による違いはあまりなかった。

表111 発見後の経過と年齢

	前期高齢者 (74歳未満)		後期高齢者 (75~84歳)		超高齢者 (85歳以上)		合計	
	度数	列のN%	度数	列のN%	度数	列のN%	度数	列のN%
治療が必要で入院した	3	11.1%	7	12.7%	2	5.7%	12	10.3%
治療は必要なかったが入院した	1	3.7%	0	0.0%	1	2.9%	2	1.7%
もともとの居住地へ帰った	18	66.7%	38	69.1%	24	68.6%	80	68.4%
もともとの居住地では受入が困難なため施設に入所した	2	7.4%	5	9.1%	3	8.6%	10	8.5%
その他	1	3.7%	4	7.3%	1	2.9%	6	5.1%
わからない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
無回答	2	7.4%	1	1.8%	4	11.4%	7	6.0%
合計	27	100.0%	55	100.0%	35	100.0%	117	100.0%

生存して発見された事例の現在の状況であるが、「もともとの居住地にいる」が66名(56.4%)と過半数を占めていたが、「施設に入所している」も24名(20.5%)と2割、そして「他界した」も11名(9.4%)と1割いた。

なお、男女による違いをみると女性は「施設に入所した」が13名(26.5%)であるのに対して、男性は11名(16.2%)であった。

表 112 現在の状況と性別

	男性		女性		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
もともとの居住地にいる	38	55.9%	28	57.1%	66	56.4%
施設に入所している	11	16.2%	13	26.5%	24	20.5%
入院している	7	10.3%	2	4.1%	9	7.7%
他界した	8	11.8%	3	6.1%	11	9.4%
その他	1	1.5%	1	2.0%	2	1.7%
わからない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
無回答	3	4.4%	2	4.1%	5	4.3%
合計	68	100.0%	49	100.0%	117	100.0%

現在の状況と年齢をみると、前期高齢者では「入院している」が 5 名 (18.5%), 後期高齢者では「施設に入所している」が 14 名 (25.5%), 超高齢者では「他界した」が 6 名 (17.1%) となっていた.

表 113 現在の状況と年齢

	前期高齢者 (74歳未満)		後期高齢者 (75~84歳)		超高齢者 (85歳以上)		合計	
	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %	度数	列の N %
もともとの居住地にいる	13	48.1%	33	60.0%	20	57.1%	66	56.4%
施設に入所している	4	14.8%	14	25.5%	6	17.1%	24	20.5%
入院している	5	18.5%	3	5.5%	1	2.9%	9	7.7%
他界した	3	11.1%	2	3.6%	6	17.1%	11	9.4%
その他	0	0.0%	2	3.6%	0	0.0%	2	1.7%
わからない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
無回答	2	7.4%	1	1.8%	2	5.7%	5	4.3%
合計	27	100.0%	55	100.0%	35	100.0%	117	100.0%

10. 生死に関する要因について

今回の分析対象になった 204 名の内、発見時に生存していた例が 117 名、死亡していた例が 87 名いた。そこで、行方不明認知症者の生死に関する要因を χ^2 検定で検証した。

分析は行方不明者の基本属性 [年齢、性別、認知症の程度 (F A S T)]、介護者の行方不明の危機感、行方不明時の状況 (これまでの行方不明回数、季節、時間帯)、行方不明後の対応 (警察への行方不明者届提出までの期間、警察以外の捜索開始時期、発見までの期間、発見された場所、発見した人) について行った。ただし検定に当たり、非該当、無回答、シングルアンサーにおける複数回答、および「わからない」は除いて行った。なお、変数のカテゴリーが多いもの、回答に偏りがあるものについてはカテゴリーをまとめた。

① 基本属性との関連

性別によって生死に差があるか χ^2 検定を行ったところ、「女性」の方で有意に死亡者が多かった。

表 114 性別と生死

	生存		死亡		合計	
	度数	行の N %	度数	行の N %	度数	行の N %
男性	68	64.2%	38	35.8%	106	100.0%
女性	49	50.0%	49	50.0%	98	100.0%
合計	117	57.4%	87	42.6%	204	100.0%
(p<0.05)						

年齢によって生死に差があるか χ^2 検定を行ったところ、「超高齢者」は有意に生存者が多かった。

表 115 年齢と生死

	生存		死亡		合計	
	度数	行の N %	度数	行の N %	度数	行の N %
前期高齢者 (74歳未満)	27	57.4%	20	42.6%	47	100.0%
後期高齢者 (75~84歳)	55	50.5%	54	49.5%	109	100.0%
超高齢者 (85 歳以上)	35	72.9%	13	27.1%	48	100.0%
合計	117	57.4%	87	42.6%	204	100.0%
(p<0.05)						

認知症の程度 (F A S T) によって生死に差があるか χ^2 検定を行ったところ、認知症の程度が軽い方が死亡している傾向があった。

表 116 認知症の程度 (F A S T) と生死

	生存		死亡		合計	
	度数	行の N %	度数	行の N %	度数	行の N %
正常 (ステージ 1・2)	13	40.6%	19	59.4%	32	100.0%
軽度認知障害 (ス テージ3)	6	37.5%	10	62.5%	16	100.0%
軽度認知症 (ス テージ4)	14	70.0%	6	30.0%	20	100.0%
中等度認知症 (ス テージ5・6)	65	60.7%	42	39.3%	107	100.0%
重度認知症 (ス テージ7)	11	61.1%	7	38.9%	18	100.0%
合計	109	56.5%	84	43.5%	193	100.0%
(p<0.1)						

② 介護者の行方不明危機感

介護者が行方不明になる危機感を感じていたかによって生死に差があるか χ^2 検定を行ったところ、有意な差はなかった。

表 117 行方不明危機感と生死

	生存		死亡		合計	
	度数	行の N %	度数	行の N %	度数	行の N %
感じていた	65	59.6%	44	40.4%	109	100.0%
感じていなかった	41	51.3%	39	48.8%	80	100.0%
合計	106	56.1%	83	43.9%	189	100.0%
(n. s.)						

③ 行方不明時の状況

これまでの行方不明回数によって生死に差があるか χ^2 検定を行ったところ、「1回」で有意に死亡者が多かった。なお、「3回」も死亡者が多かった。

表 118 行方不明回数と生死

	生存		死亡		合計	
	度数	行の N %	度数	行の N %	度数	行の N %
1回	26	41.9%	36	58.1%	62	100.0%
2回	24	72.7%	9	27.3%	33	100.0%
3回	13	50.0%	13	50.0%	26	100.0%
4回以上	44	77.2%	13	22.8%	57	100.0%
合計	107	60.1%	71	39.9%	178	100.0%
(p<0.001)						

D. 考察

これまで、国内外を問わず認知症の行方不明者の実態は明らかになっていなかった。今後の認知症高齢者の増加に伴い、行方不明者の増加が予想される。そこで我が国の認知症の行方不明者の実態を明らかにすべく実態調査を行った。

今回の調査により、行方不明者の実態とその生死に関連する可能性がある要因が明らかとなった。以下では、i) 行方不明者の特徴、ii) サービス利用状況、iii) 徘徊のパターン、iv) 生死に関連する要因、について考察する。

【行方不明者の特徴】

従来、徘徊高齢者は中等度以上の重症度を持つ認知症例が多いと想定されていたが、今回の調査から、行方不明となる徘徊認知症者には比較的軽度な例が少なからず含まれていることが明らかとなった。

また、行方不明の直前には、認知症の中核症状に何らかの変動がみられた者が約7割、周辺症状に何らかの変動が認められた者が約8割いた。さらに半数近くで認知症以外の疾患や怪我、身体活動に変化が認められていた。ただし、今回の調査対象者は全てが行方不明になっており、これらが行方不明となる徘徊高齢者の特徴であるかは不明である。

世帯状況としては、行方不明者に独居例はほとんどおらず、自宅で同居者がいる場合が9割を占めていた。これは本調査法の持つサンプリング・バイアスに寄るものと思われ、単独世帯における行方不明者の実態を明らかにするには、別の調査方法を考える必要があることが分かった。介護状況は約半数がいわゆる老老介護（ただし認認介護は非常に少ない）であり、介護者は配偶者あるいは子が大半を占めていた。

【サービスの利用状況】

今回の調査対象は認知症または認知症の疑いのある者であるが、要介護認定を申請していない者が3割近くいた。また介護サービスを利用していない者は3割以上、医療サービスを利用していない者も3割以上いた。

介護サービスを利用していても通所介護の場合が多く、他の介護サービスの利用は少数であった。同様に医療サービスの場合、通院・在宅精神療法が多く、他の医療サービスの利用は少数であった。このことは必要とされる医療や介護を受けていない状況の中で行方不明となった者が少なからずいることを示唆している。

認知症高齢者（疑いを含む）の場合、自らの判断でサービスを利用する事が困難なことも多く、地域包括支援センター等が行う地域の実態把握の中でニーズを把握し、サービス利用につなげていく必要があるだろう。

【徘徊のパターン】

行方不明になった場所は「自宅から」が最も多く8割近くを占めていた。行方不明になる徘徊は、冬に多く、夏は少なかった。時間帯としては「12～16時」と「16～20時」という午後から夜にかけて多く、この時間帯で約半数を占めていた。これらは、いわゆる「夕暮れ症候群」の徘徊パターンと一致する。

行方不明時についての行動としては「散歩などいつも決まった行動中」が4分の1を占めるが、半数はそれ以外の行動中であり、様々な行動が認められた。

これまでの行方不明回数は「1回」が3割と最も多かったが、次に多かったのは「4～10回」であり2割を占めていた。「21回以上」という例も少数であるがあり、何度も行方不明になる者が少なからずいた。

行方不明の期間に関しては、7割以上がいなくなつてから2日以内に発見されている。ただし、発見までの期間と徘徊の移動距離にはあまり関連がないようであり、2日以内に発見された場合でも、発見場所は自宅内及び付近から県外にまで及んだ。

【生死に関連する要因】

本調査から示された行方不明者の生死に関連する要因について述べる。

今回の調査では死亡者87名中61名から死因について回答があった。死因をみると溺死17名・水死7名、凍死13名・低体温症8名と、水や気温に関連する死因が4分の3近くを占めていた。つまり、今回の調査対象となった者に限られるが、認知症による行方不明者の死因には高齢による体力低下や認知症による判断能力の低下などが原因と想定される一定の傾向があると考えられる。これは死亡者が「冬」に多く「夏」に少ないと、行方不明になる時間帯が深夜から早朝であると死亡者の割合が高くなることにも関係していると思われる。

また、生存と関連する要因としては警察への行方不明者届提出時期や警察以外の捜索活動開始時期が関係していた。これは、生存は行方不明から発見されるまでの期間が非常に重要であり、当日に発見されている場合は8割以上が生存していたが、発見が遅くなるに従い生存している割合は急激に低下しており、5日目以降では身元不明のまま保護されていない限り、生存の可能性は極めて低いことが関係している。つまり、行方不明発覚後すぐに捜索活動を開始することが重要であり、初動における一日の違いが生死を分ける可能性がある。

しかし、行方不明者を発見しているのは、半数は捜索活動に参加していなかった者であり、行方不明後すぐに捜索活動を始めれば良いというわけでもない。また、SOSネットワーク等は利用されていないケースが多く（地域に無い場合も含む）、利用されている場合も有効性の評価は分かれていた。

E. 結論

今回の調査は、認知症による行方不明者に関する先行研究が国内外ともにほとんど無い中で探索的に行われた。また、郵送調査であるため回収率も3割を切っており、分析対象は204ケースに留まった。しかし、行方不明者の性別、年齢、介護状況、認知症の程度、行方不明時の状況、捜索状況、生死と関連する要因などが明らかとなつた。

厚生労働省は平成27年1月に「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）」を公表した（厚生労働省、2015）。その中の「5. 認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進」において「(4)安全確保」の一つとして行方不明者の早期発見・保護に言及している。そして行方不明高齢者についてはSOSネットワークなどの仕組みの構築などを提唱している。

しかし、今回の調査からSOSネットワーク等の構築だけでは行方不明高齢者に十分に対応できない可能性が示唆された。行方不明者は徒歩だけでなく、車を自ら運転したり、電車・バスなど公共輸送機関を利用したりすることもあり、短時間の内に普段移動する範囲を超えて遠方に行ってしまうこともある。

また、行方不明者を発見しているのも半数は捜索に参加していない人たち、すなわち、偶然、その場に居合わせた人たちである。そのため行方不明高齢者の捜索のためにはSOSネットワーク等の構築は必要であるが、それをもって対策が十分であることにはならない。

ここで今回の調査で明らかになった知見に基づき、今後必要とされる認知症による行方不明高齢者対策について述べたい。

① 今後、認知症高齢者の増加に伴い、行方不明高齢者も増加する可能性がある。行方不明者の行方不明防止や早期発見のためには、行方不明となった高齢者の実態を明らかにする必要がある。

そのためには政府が主導して関係省庁が協力して行方不明者の実態を詳細に把握し、毎年、公表していくなど国としての取り組みを進めていく必要がある。例えば、高齢者虐待では高齢者虐待防止法に基づいて、毎年、高齢者虐待に関する詳細な情報が公表されている。

行方不明者に関する全国調査は、大学や研究機関では困難であり国が主導して進めていく必要がある。そしてその結果を行方不明者対策に反映させていくことが求められる。

② 行方不明高齢者の発見が行方不明当日である場合は生存している割合が高いが、翌日、3~4日目と時間が経過するにしたがって生存の可能性が急激に低下し、5日目以降になると生存の可能性は極めて低くなる（身元不明のまま、保護されている場合を除く）。

また行方不明高齢者の半数以上は、おおよそ普段移動する範囲の外で発見されている。当日発見されているにも関わらず遠方まで行ってしまっている場合もある。一方、生死という点からみると、死者の半数以上がおおよそ普段移動する範囲の中となっている。

つまり、行方不明高齢者の捜索は、おおよそ普段移動する範囲の中と、それ以上の範囲を同時に迅速に行う必要がある。そのためにもSOSネットワークなどの構築だけでなく、警察（署）による行方不明高齢者捜索のための広域連携を進めていくなど、広範囲な行方不明高齢者捜索ネットワークを構築していく必要がある。

そしてこのようなネットワークを有効に活用するためにも、家族介護者は行方不明が発覚した時点ですぐに警察への行方不明者届を提出するとともに、関係機関等への捜索の協力を至急求める必要がある。

③ 行方不明高齢者の半数は、捜索を行っていた人ではなく、偶然、その場に居合わせた人の善意による通報等で発見されている。前述のように、行方不明高齢者の生存割合は時間の経過とともに急激に低下する。もし、これらの人々が通報等を行わず、行方不明高齢者の発見が遅れていれば、最悪の結果になった可能性もある。

そのため、広く国民に行方不明高齢者捜索の必要性と協力を呼びかけ、様子がおかしい高齢者を発見した場合は声をかける、あるいは警察に通報するよう広く啓発を行う必要がある。

例えば、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌などで広く周知してもらったり、駅、電車・バス・タクシーなど公共輸送機関で利用者にアナウンスしてもらったりするなど、全国的な取り組みを進めていく必要がある。

④ 「夕暮れ症候群」と呼ばれるように、行方不明になる高齢者は夕方頃に多くなる。しかし、生死という観点からみると、深夜から早朝にかけて行方不明になっていると死亡している割合が高くなっている。

これは家族が就寝中で行方不明に気付くのが遅れたり、周囲が暗いために事故にあい易かつたり、気温が低いなど昼間より危険が伴うことが関係しているかもしれない。いずれにしろ、深夜から早朝、つまり家族が就寝している時間帯にかけての行方不明を防止するための対策を講じる必要がある。

しかし、このような取り組みを家族のみに任せることは介護負担の増大につながり、また高齢者が24時間外出できないような施錠をすると高齢者虐待になる可能性がある。

そのため、深夜から早朝にかけての行方不明

防止のためにどのような方策を取り得るのか、研究や現場の専門職の創意工夫を積み重ねて検討していく必要がある。

- ⑤ 高齢者によっては、これまでに何度も行方不明になっていることがある。しかし、今回の調査から初回（1回目）の行方不明において死亡する割合が最も高いことが明らかとなった。

前述のように行方不明高齢者は、発見の1日の遅れが、その生死に大きく影響する。これまで行方不明になった経験や行方不明の兆候が無くとも、行方不明にならぬ躊躇なく警察に行方不明者届を出し、関係機関に捜索の協力を求める必要があることを家族介護者に周知する必要がある。

- ⑥ FASTによる認知症の程度と行方不明の関連をみると、行方不明高齢者の3割以上がステージ4（軽度認知症）以下であった。また生死との関連をみると、死亡者の内、4割以上がステージ4（軽度認知症）以下であった。このことから、認知症の程度が軽度であったとしても徘徊による行方不明があり、死亡に至る事例が少なからずあることがわかった。換言するならば、認知症が軽度であるから行方不明になることは無いという先入観を持ってはならない。

前述のように、高齢者の生死は発見するまでの時間が大きく影響する。認知症が軽度（より軽い状態）であっても行方不明になる可能性があることを意識し、行方不明になった場合は遅滞なく警察に行方不明者届を出し、関係機関に捜索の協力を求める必要があることを家族介護者に周知する必要がある。

④と⑤にも関係するが、例えば女性が妊娠した時に母子手帳が交付される。同様に軽度認知障害や認知症の診断、あるいは要介護認定を受けた時に、家族に対して「介護手帳（仮称）」のようなものを交付して、介護に関する事項だけでなく、行方不明のリスクや対応方法などを記載して周知するなど何らかの対策を講じる必要があるだろう。

最後に本研究の限界について述べておきたい。本研究の対象は、あくまでも警察に行方不明者届が出された者に限定されており、行方不明者届が出されていない行方不明高齢者は含まれていない。また、調査対象は行方不明者届が出された高齢者の家族を対象としており、独り暮らしの高齢者が調査対象から外れている可能性が高く、サンプリング・バイアスがあると考えられる。また調査票の回収率も3割を切っており、サンプルの代表性にも限界があると考えられる。しかし、これらの知見は今後の研究の方向性を示すとともに、行方不明高齢者対策を検討

する基礎資料になるものと期待される。そこで、分析対象となつた204ケースについて、生存事例と死亡事例に分けて事例の要約を資料として掲載した。これらを見れば、一人ひとりの行方不明者の概要がわかるので参考にして頂きたい。

最後になったが、本研究は対象者が行方不明者のみであり、今回得られた知見が行方不明となる者にみられる特徴であるかは不明である。今後は行方不明にならない（徘徊する）認知症例を対照とした研究が望まれる。

謝辞

本研究を実施にご協力頂いた高齢者ご家族および関係者の皆様、自治体の皆様に心よりお礼を申し上げます。

F. 引用文献

1. 警察庁生活安全局生活安全企画課「平成25年度中における行方不明者の状況」.2014
2. 厚生省老人保健福祉局長通知：「痴呆性老人の日常生活自立度判定基準」の活用について」の一部改訂について、平成18年4月3日老発第0403003号、2006.
3. 厚生省大臣官房老人保健福祉部長通知：障害老人の日常生活自立度(寝たきり度)判定基準、平成3年11月18日老健第102-2号、1991.
4. 厚生省「痴呆性老人の日常生活自立度判定基準」の活用について（平成5年10月26日老健第135号 厚生省老人保健福祉局長通知）. 1993.
5. Lawton, M.P & Brody, E.M. : Assessment of older people :Self-Maintaining and instrumental activities of daily living. *Gerontologist*, 9, 179-186, 1969.
6. Mahoney F.I. & Barthel D. : Functional evaluation: the Barthel Index. *Maryland State Med Journal*, 14, 56-61, 1965.
7. Reisberg B. et al. : Functional staging of dementia of the Alzheimer type. *Ann NY Acad Sci*, 435, 481-483, 1984.
8. 本間昭、臼井樹子:Functional Assessment Staging(FAST), 日本臨床61巻増刊号9. 125-128. 2003.
9. 長寿科学高総合研究 CGA ガイドライン研究班(鳥羽研二監修)「高齢者総合的機能評価ガイドライン」、厚生科学研究所.2003
10. 厚生労働省「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～」、2015.

G. 研究発表

1. 論文発表
該当なし
2. 学会発表

該当なし

H. 知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む。)

1. 特許取得

該当なし

2. 実用新案登録

該当なし

3. その他

該当なし

